

ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ(※3)	文化財の所在地(※4)
ひだのたくみ 飛騨工制度				
1	いしばしはいじとうしんそ 石橋廃寺塔心礎 石橋廃寺跡出土品 こうじゅあん 光寿庵跡 光寿庵跡出土瓦	市有形(考古資料) 市有形(考古資料) 市史跡 県重文	飛騨では14箇寺以上と全国屈指の密度で古代寺院が見つかり、飛騨工制度が成立する背景となった。国府地区は中でも特に多く見つかる地区である。石橋廃寺や光寿庵跡はその内の一つで、礎石が見つかる。共に都で働く官人を描いた瓦が出土しており、飛騨匠の都とのつながりを示す。	
2	飛騨国分寺塔跡 飛騨国分寺の大イチョウ	国史跡 国天然記念物	古代の国分寺・国分尼寺は高山盆地に建てられた。それぞれ礎石が現存する。国分寺塔跡には七重塔が建っていたが、建設の際、柱の寸法を間違った棟梁に、娘が柱の上に桁組を置くアイデアを教えたが、その秘密を守るために娘は自ら命を絶ち、そこに墓標として植えられたのが国分寺の大イチョウだという悲しい伝説が残されている。	
3	こくぶんにじ 国分尼寺金堂跡	市史跡	飛騨国分尼寺は発掘によって礎石配置が判明したが、奈良・唐招提寺等と同様、前一間を吹き放しとしている。この構造をもつものは全国の国分寺・国分尼寺のなかでここだけである。飛騨工が都で培った知識・経験を発揮して作った一例である。	
中世社寺建築群				
4	あんこくじきょうぞう 安国寺経蔵 あわき 荒城神社本殿 あたゆた 阿多由太神社本殿 あまの 熊野神社本殿	国宝 国重文 国重文 国重文	古代寺院が多数見つかると、古代における飛騨匠の活動の一大拠点でもあった国府地域では、室町時代の社寺建築が今も多数残り、当時の匠達の技術を伝える。 安国寺経蔵は応永15年(1408)建立で、内部の八角輪蔵は現存日本最古の輪蔵(回転書架)である。輪蔵には当時、明から入手した大蔵経(現存2000帖)が納められている。	

			<p>荒城神社本殿は明徳元年（1390）再建、阿多由太神社は室町時代初期、熊野神社は室町時代後期の建立。部材はいずれも地元のサワラ、ヒノキ、スギなど、現在では入手困難のほどの良材を用いて作られている。</p>
5	<p>照蓮寺本堂 しょうれんじ</p>	国重文	<p>高山地域における中世の飛騨匠の活動を知ることのできる建物。照蓮寺本堂は昭和 35 年に荘川地区から移築されたもので、浄土真宗本堂建築のうち国内現存最古のもの。長さ 7 間の長大な梁、非常に緻密な木目の板材等、飛騨の良材をふんだんに使う。旧所在地は上白川郷と呼ばれた飛騨の中でも奥まった所であり、飛騨山中における当時の建築活動の在り方を示す。</p>
6	<p>国分寺本堂 ひだのたくみもっかくだいみょうじん 飛騨匠木鶴大明神 像及び版木 ふじわらむねやす 藤原宗安像</p>	<p>国重文 市有形民俗 未指定</p>	<p>本堂は室町時代の作で、高山地域における中世の飛騨匠の活動を知ることのできる一例。本堂には木鶴大明神像や藤原宗安像が安置されている。</p> <p>木鶴大明神像は飛騨匠の一人と考えられた平安時代の名工・韓志和の像（藤原宗安像ともいう）で、古くから崇敬を集めてきた。国分寺の木鶴大明神の御札は「匠講」の構成員に配られている。</p> <p>藤原宗安は飛騨権守と名乗った鎌倉時代末の大工。長滝寺大講堂（焼失・郡上市・旧国宝）、高富白山神社（山県郡・重文）などを建て、現在も飛騨匠の祖として崇められている。</p>
高山城とゆかりの建築群			
7	<p>高山城跡 たかやまじょうせき</p>	県史跡天然記念物	<p>高山城は天正 16 年（1588）から慶長 8 年（1603）にかけて、飛騨匠達が 16 年の年月をかけて建てた平山城で、近世中期、高山陣屋の地役人によって書かれた地誌『飛騨国中案内』には「城郭の構え、およそ日本国中に五つともこれ無き見事なるよき城地」とされた名城であった。城は元禄 8 年（1695）に取り壊され、わずかに残る石垣等に在りし日の姿を偲ばせる。</p>

8	うんりゅうじしやうろうもん 雲竜寺鐘楼門 そげんじ 素玄寺本堂 しんめしんじや 神明神社絵馬殿 ほっけじ 法華寺本堂 じんや おんくら 高山陣屋 (御蔵)	市有形 (建造物) 市有形 (建造物) 県重文 県重文 国史跡	飛騨匠達が 16 年の年月をかけて建てた高山城は、寒冷地で瓦が割れるため屋根は板葺にするなど、飛騨の特性に合わせて作られていた。元禄 8 年 (1695) に取り壊される以前に移築された建物が現存している。 雲龍寺鐘楼門は慶長 6 年 (1601) に城内の黄雲閣を移築したもの。 素玄寺本堂は寛永 12 年 (1635)、三ノ丸にあった評議場を移築したもの。 神明神社絵馬殿は元禄 8 年 (1695)、高山城取り壊しの際に城内の月見殿を移築したもの。 法華寺本堂は 17 世紀前半、高山城内の建物を移築したもの。 いずれの建物も通常の社寺建築と異なり、屋根の小屋組は細い部材を貫で補強する構造となっており、内外の意匠も寺院らしさが見えず書院造となっている。 また、高山陣屋の御蔵も高山城取り壊しの際に三ノ丸の米蔵を移築したもの。 近世初期、飛騨匠が造った城郭建築の姿を知ることができる建築群。	
近世・近代の匠達				
9	みずまきがみ [水間相模の建築群] 国分寺三重塔 だいおうち 大雄寺山門 ひがしやまはくさん はいでん 東山白山神社拝殿 ほっけじ ばんじんどう 法華寺番神堂 東照宮本殿	県重文 市有形 (建造物) 未指定 市有形 (建造物) 県重文	「飛騨匠の祖」として崇敬を集める飛騨権守・藤原宗安の直系とされるのが、江戸時代中期以降 4 代にわたり「水間相模守」を名乗り、優れた彫刻を特徴とした水間一門である。市内中心部には国分寺三重塔、大雄寺山門、東山白山神社拝殿、法華寺番神堂があり、その他、周辺地域には東照宮本殿、願生寺本堂、福成寺本堂、速入寺本堂、円徳寺鐘楼等、多くの作品が残されている。	
10	[水間一門の流れをくむ建築群] よしじま 吉島家住宅	国重文	吉島家住宅は四代水間相模に師事した西田伊三郎により明治 40 年 (1907) に建てられた町家建築。土間の吹抜けの梁は木の美しさが際立つように高い技術によって加工され、束と梁が整然とした構成となる。伝統に基づき、全体	

			としてこれ見よがしでない簡素な美しさを見せる。高山における町家建築の白眉。国府地域にある清峯寺観音堂も西田伊三郎の作。	
11	かわじり じすけ [川尻治助の建築群] くさかべ 日下部家住宅 たうえ 田上家住宅	国重文 市有形（建造物）	川尻治助は飛騨の大工の名門、谷口家の谷口延恭 <small>のぶやす</small> に師事した。彫刻の名手でもあり、一刀彫 <small>いっとうぼり</small> の名品も残している。明治 12 年（1879）に建てられた日下部家住宅では、これまで社寺建築に使われていた軒裏の「セガイ」を民家に取り入れるなど、高山の近代民家建築を切り開いた。吹き抜けの梁組はスケール感を感じさせ、隣合う吉島家との対照性を感じさせる。 田上家住宅は明治 15 年（1882）、街道沿いに建てられた農家建築。町家建築である日下部家住宅と共通の意匠を取り入れ、内部も贅を凝らした造りとなる。 とともに近世までの規制から解放され、銘木をふんだんに使い、意匠も凝らし、棟梁 <small>とうりょう</small> が技術とセンスを最大限発揮した近代民家建築の代表作。	
12	[松田一門の建築群] だいおう じしやうどう 大雄寺鐘堂 おもてもん 国分寺表門 ふじしゃ 富士社社殿	県重文 市有形（建造物） 市指定（建造物）	松田家は江戸時代前期より活躍する大工の家系で、なかでも太右衛門は多くの作品を残し、また優れた弟子も多く育てている。 大雄寺鐘堂は元禄 2 年（1689）、太右衛門の父・又兵衛 <small>またべゑ</small> の作。 国分寺表門は元文 4 年（1739）、太右衛門の手による。また、富士社社殿は寛延元年（1748）に太右衛門により建てられた、現存数少ない神社建築。これらの他、正宗寺本堂 <small>りやうとくじ</small> 、了徳寺本堂 <small>りやうとくじ</small> 、東等寺本堂 <small>とうとうじ</small> 、随縁寺本堂 <small>ずいえんじ</small> 、円徳寺本堂 <small>えんとくじ</small> 、歓喜寺本堂等、多くの作品を残している。	
13	こつぽかね 小坪規矩目録	未指定	正徳 2 年、名工・松田太右衛門 <small>たごまもん</small> によって書き写された大工の雛形本。技術伝承の様相を伝える。	
14	たくみ 飛騨内匠流大工秘密傳受 ひだのかみ 飛騨守内匠流秘事抜書 ばんしやう 番匠取締規定書	未指定	「飛騨内匠流」の大工の作法や屋根の曲線の出し方等を記したもの。大工秘密傳受は正徳 3 年、秘事抜書は宝暦 7	

			年の日付がある。番匠取締規定書は明治3年に改正された、大工仕事をする上での心掛け等が記されたもの。宝暦年中に決められ、文化・文久年間にも一部改正されている。近世飛騨の大工の技術の実態とその伝承の様相を伝える。
木を生かす伝統工芸			
15	飛騨 ^{しゅんけい} 春慶	記録作成等の措置を講ずべき無形文化財 伝統的工芸品	400年前、大工が持参したサワラの打ち割った木目の美しさを生かすため、金森宗和（飛騨国主金森可重の長男で後に宗和流茶道の開祖となった）が透明な漆で盆に仕上げることを命じたことに始まる漆器で、透明で木地の木目が見える漆を用いるため、素材の見立て、加工から漆塗まで全てにわたって高い技術が要求される。高山を代表する伝統工芸の一つである。
16	木地師 ^{きじし} の集団墓地	市有形民俗	木地師は良質な木材を求めて山々を渡り歩き、椀の木地等を作成する職業集団である。山林資源に恵まれた飛騨には木地師の足跡が残されている。宗猷寺には宝永8年（1711）以降に築かれた93基の木地師の墓が残されている。
17	いちい ^{いちい} つとうぼり 一位一刀彫	未指定 伝統的工芸品	江戸時代末、イチイの木を材料とし、色彩を施さず、イチイの木が持つ木の美しさを生かした彫刻として完成された。一刀彫師には大工の一門の流れをくむものも多く、工芸にとどまらず、建築装飾を支えた。
18	たかやま ^{たかやま} まつり 高山祭屋台	国有形民俗 県有形民俗	高山祭屋台は大工、彫刻、漆をはじめ飾金具、鍛冶など、高山の職人の技術を総動員して作られた傑作である。江戸型の山車 ^{だまし} を祖形とし、上方の装飾 ^{かみがた} やからくり人形を取り入れて成立したもので、からくり人形を横から操る仕組み、屋台の方向転換に用いる戻し車 ^{もどぐるま} など、高山独自の形に進化した。背が高く下段が小さいため一見不安定に見えるが、全体を見ると優美な姿を見せるアンバランスの美がある。また、各部は多くの飾金具 ^{かざりかなぐ} や彫刻で飾られるが、全体でみると落ち着いた美しさを

			もつ。このようなバランスの良さと奥ゆかしさこそが、高山の伝統的な感性であり、町人の美意識とそれに応える職人の技術によって作り出されるのである。現在も市の技術認定を受けた高山の職人たちによって維持修理が行われている。	
19	<small>うとうしゃくし</small> 有道杓子	市無形民俗	江戸時代以来、久々野地域の有道地区に伝わるしゃくし。材質のホオノキは材質が比較的柔らかく、素朴な色合いを持つ白木で、乾燥しても形が変わらない。これを一本の木から削り出して作製するため、丈夫で実用性も高い。大工のみならず、高山に住む皆が木に対する知識と経験を有することを示す例。	